最　終　試　験　の　結　果　の　要　旨

神奈川歯科大学　総合歯科学講座　　渕上　慧に対する最終試験は、主査　木本克彦教授、副査　三辺　正人教授、副査　児玉利郎教授　により、論文内容ならびに関連事項につき口頭試問をもって行われた。

また、外国語の試験は、主査　木本克彦教授によって、英語の文献読解力について口頭試問により行われた。

その結果、合格と認めた。

主　査　木本　克彦

副　査　三辺　正人

副　査　児玉　利郎

論　文　審　査　要　旨

日本人におけるインプラント周囲炎発症に関する臨床的考察

―　発症率とリスク要因からの検討　―

神奈川歯科大学　総合歯科学講座

（指　導：　櫻井　孝教授）

主　査　　木本　克彦

副　査　　三辺　正人

副　査　　児玉　利郎

論　文　審　査　要　旨

本論文は、これまでに申請者が報告してきた“部分無歯顎欠損患者を対象としたインプラント周囲骨吸収に関する臨床的検討”（日口腔インプラント誌 45:495-501,2015）と“A diversity of peri-implant mucosal thickness by site.”(Clin Oral Implants Res 28:171-176,2017)の２つの論文をまとめることにより、日本人におけるインプラント周囲炎の発症率とリスク要因を新たに明らかにしている。

申請者は、はじめにインプラント治療における口腔内およびインプラント体の部位特異性に着目し、メインテナンス期のインプラント周囲溝レベルの評価を行っている。次に、メインテナンス期におけるインプラント周囲炎の発症率を調べ、さらにはインプラント周囲炎の発症に影響を及ぼすリスク要因に、部位特異性の要因を新たに加えて再解析を行っている。これまで日本人を対象としたメインテナンス期のインプラント周囲炎の発症に関する臨床報告はほとんど見受けられず、本論文において実証しようとする研究目的は高く評価できる。研究デザインは、後ろ向きコホート研究ではあるが、部位特異性に基づくインプラント周囲溝レベルの評価に対しては、35 症例（70 本のインプラント）を対象とし，インプラント周囲炎の発症率とリスク要因については、501 症例(男性 170 症例，女性 331 症例，平均年齢 56.9±9.9 歳）（1125 本のインプラント）を対象とするなど、研究目的に対し十分なサンプリングが行われ、倫理上の問題がないことも確認された。また、データ解析においてもインプラント周囲溝レベルの評価には、ノンパラメトリック解析を用い，リスク要因の分析には、ロジスティック回帰分析を応用するなど適切な解析手法が行われている。その結果、本研究では、以下の所見を導いている。①インプラント周囲溝レベルの平均値は 3.6㎜ であるが，そのばらつきは大きかった。②インプラント周囲溝は、口腔内の部位ごとで異なり部位特異性が認められたのに対して、インプラント体ごとの部位特異性は認められなかった．③日本人におけるインプラント周囲骨炎の発症率は患者単位で 13.0%, インプラント単位で 9.5%であった. ④インプラントの表面性状，歯周疾患，対合歯の状態，および補綴装置の連結がインプラント周囲炎の発症のリスク要因であることが示唆されたが, インプラント周囲溝レベルは、リスク要因として認められなかった。

本審査委員会は、論文内容と研究デザインのリミテーションに関して、口頭試問を行ったところ十分な回答が得られることを確認した。さらに日本人のデータからインプラント周囲炎の発症率とそのリスク要因を明らかにしたことは新規性が高く、今後の我が国におけるインプラント治療の臨床研究に大きく貢献するとの結論に至った。そこで、本審査委員会は申請者の博士論文が博士（歯学）の学位に十分に値するものと認めた。